



Title	テオフラストス「形而上学」研究
Author(s)	池田, 英三
Citation	北海道大學文學部紀要, 15(1), 226-188
Issue Date	1966-12-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33309
Type	bulletin (article)
File Information	15(1)_PL226-188.pdf



[Instructions for use](#)

テオフラストス「形而上学」研究

池 田 英 三

テオフラストス「形而上学」研究

池 田 英 三

は し が き

かの^{いつく}厳しき実在の姿を
見しことなきか。⁽¹⁾

周知のような事情のために、アリストテレスが再び、これを限りに、アテナイを立ち去らなければならぬことになったとき (ca.323 B.C.)、その師のあとを承け継いで、学園リュケイオンの二代目の学頭たるべく委任されたテオフラストス (ca. 371—ca. 278 B.C.) は、その講筵に参するものは二千人を以て数え、その著述するところは二百四十篇四百九十巻に達するものがあつた、と伝えられるほどの⁽²⁾、文字通りに博学かつ多筆の碩学である。

だが、それにもかかわらず、彼のこの「形而上学」は僅々数葉からなる、断章ともいふべき小篇にすぎない。それを内容的にみるならば、まづ形而上学序論とでも称すべきものであつて、あのアリストテレスの「形而上学」の規模壮大なる構成と展開、該博周密な細目の検討などには到底比較するべくもないのである。

ところで、これが占めるべき立場として、一般に説かれるところは、アリストテレスの思惟が行きついた一つの尖端として、きわめて超越的・絶対的なヌウスそのものである神の觀念をもととして、そこから、やがて次第にストア学派の、自然の内に遍在するロゴスという、いわば汎神論的な形而上学へと移行行くべき道程における、まずその一步を踏み出したものである、とされている。⁽⁴⁾

しかも、言うまでもなく、全体としては、当然アリストテレスの形而上学体系に強く依存しており、あくまでもそれに対しては内在的な地点に留まっておりますながら、しかし、テオフラストスがこの小冊子に⁽⁵⁾

において目論んでいる主眼目としては、先師の体系が包蔵しているアポリアを積極的に剔出ししようとする、むしろかなり批判的な、冷徹とも言える眼差しの保持に、その意義が求められるであろう。⁽⁶⁾

もっとも、あのように定式化してしまったその位置づけの妥当性については、しばらく措くこととしても、実はこの事情は、われわれがまず外面的にテキストに接近を試みるときにも、直ちに気付かれるところなのである。すなわち、テオフラストスがこの形而上学的断章において駆使をほしきままにしている用語は、狭い意味での哲学的専門用語のみには限らずに、殆んどすべてアリストテレスのものをそのままに遵用し踏襲していると言ってもよいほどであり、個々の表現について、それと対照されるべき用例を、アリストテレスの著作中に——もちろん主として「形而上学」の中に——求めて見出すことは、まことに容易なことと言える。

したがって、このテオフラストスの「形而上学」は単なる覚書(ὀπομνήματα)風の、極度に圧縮され簡約化された文体のものであり、単に一瞥したところでは、脈絡も分明ではない単語の羅列にすぎぬ文節に出合われることすら、間々あるにもかかわらず、しかし、上述のような関係にあるがために、個々の表現に対応すべきものを、アリストテレスの用例の中に検索して、一応はそこに意味内容の解明を尋ねてみる、という手順をとるならば、われわれにとっても、はじめはやや孤立していた語句相互の間の聯関が自ずから及び上って来て、その読み取りが漸く可能となるのである。

だがしかし、ここに現われているものは、アリストテレスの思考方式としても用語法としても、まず基本的かつ慣用的なものに準拠していると言ってもよいのであり、また他面では、それらを一々枚挙するには余裕のないことでもあるために、この小稿においては、それへの参照は一切これを省略して、この点に関する注記は全く行なわないこととした。

そこで、注解としては、訳文を試みるに際してその根拠となるべきはずの、内容の解釈の仕方をあらましなりとも説明的に補い述べるのみに止めて、また、テオフラストスの形而上学的な思考の独自性と目ざされてよい面——たとえば、目的論的見地に対する制限付けや、実証的事象への傾斜や、その方法論など⁽⁷⁾——に対しても、幾分かの顧慮を払うことは怠らなかつたつもりである。

このテキストについては、ロスおよびフォーブズの労作⁽⁸⁾によってかなりの解明に達したとはいえ、写本の伝承・原典の校合・本文の批判等々の上からして、すこぶる問題が多いのであるけれども、その読み方としてはおおむね上記ロスの校訂本に従い、その他にはトリコの訳註書⁽⁹⁾を参看し得たのみにすぎない。

訳文における〈 〉の内は、文意を多少補足するために訳者が挿入した説明であり、その他の記号の使用や、章・節の区分——これはもちろん原典にはないもの——などは、一般の慣用によっている。

注

- (1) 九鬼周造「巴里心景」より。
- (2) Cf. Diogenes Laertius, V, 36 ff.
- (3) 通常、このテキストの参照箇所を指示する際に用いられている Usener 校訂本の頁・行数付けによれば、「形而上学」の占める範囲は4a1～12b5である。なお、この頁付けは小稿の訳文には付記していない。
- (4) Cf. O. Regenbogen: Theophrastos von Eresos, S. 1393.
- (5) Cf. E. Zeller: Die Philosophie der Griechen (1921), II, 2, S. 821 ff.
- (6) Cf. T. Gomperz: Griechische Denker (1909), 3. Bd. S. 362 ff.
なお、普通に哲学史では、テオフラストスは単なるつけたりとして取り扱われているにすぎない。この学者の全体にわたって比較的詳細に記述したものとして、披見することが出来たのは、上記 Regenbogen (op. cit. Pauly-Wissowa Suppl. Bd. VII, 1353～1562) のごく総括的な概説書のみであった。
- (7) こうした面をことに強調しているものとしては、Cf. B. Farrington: Greek Science (1953), p. 160 ff.
- (8) W. D. Ross & F. H. Fobes: Theophrastus Metaphysics, with translation, commentary and introduction (1929).
- (9) J. Tricot: Théophraste La Métaphysique, traduction et notes (1948).

なお、この研究については、かつて大学院における研究テーマの一つとして、その当時、武田信一先生より御指導を賜わった。

訳 文

I

〈思惟の対象である存在と感覚の対象である存在との関係について〉

- 1 いかなる方法によって、またいかなる点をよりどころとして、われわれは第一の存在に関する研究〈いわゆる形而上学〉の範囲を定めるべきであろうか。おもうに、自然に関する研究〈自然学〉は、〈その対象となるべき存在が〉千変万化するものなのであるから、その分野は〈形而上学に比較して〉より種々雑多にわかれており、また、とにかくある人々が主張しているように、それは〈本性上からしても〉より秩序に欠ける研究なのであるが、それに対して、第一の存在に関する研究は規定されており、そして常に同一のものにかかわっている。それ故、人々は、この研究が問題とするものは感覚の対象ではなくして、不変かつ不動の存在たる思惟の対象である、としており、また一般に人々は、この研究を〈自然学に比較して〉より高尚でより優れた研究とみなしているわけである。
- 2 そこで、まづ最初に問題となるのは、次の点である。すなわち、そもそも、思惟の対象と自然的事物との間には、なんらかの關聯とか、相互の共同關係といったものが存在するのか、それとも、この両者の間にはなんの關聯もなく、この両者はとにかく共同して全実在を構成しながらも、いわばそれぞれ離れ離れに存在しているのか、という問題である。ところで、この両者の間には、なんらかの關聯が存在しているものとする方が、つまり、万有はなんの脈絡も持たないものとは異って、丁度、永遠的なものの可滅的なものに対する關係のように、思惟の対象はより先なるものであるが、自然的事物はより後なるものであるし、前者は支配的原理であって、後者はその原理に従属するものである、などのように考える方が、むしろ妥当なのである。そ

こで、もし実際そのように考えるべきであるなら、それら〈思惟の対象〉はどんな本性をもつのか、そしてどんな存在のうちにそれらのものは見出されるのか、ということが次に問題となる。

- 3 ところで、もしも思惟の対象は、ある人々が主張しているように、⁽⁶⁾ 数学の対象のうちのみ見出されるとすれば、数学の対象と感覚の対象との関聯はきわめて判然としているとは言い難いし、また、全般的な見地からしても、数学の対象は〈それが第一の原理・原因たるべき存在としては〉あらゆる点で十分な価値をそなえている、とも見受けられないのである。なぜならば、数学の対象は、図形や形体や比率などをわれわれがものに割り当てて行くことによって、いわばわれわれの手で、こしらえ上げられたものであり、それ自体は、独立には、なんらの本性をも有するものではない、と思われるからである。また、もしもそうではないとしても、数学の対象は、自然的事物のうちに、まさに生命とか運動の如き働きを生じさせるべき原因として、自然的事物に対して関聯を持っているとは、決して考えられないからである。つまり、ある人々によって、これこそ第一の存在であり、最も支配力ある存在であると唱えられているところの、あの数それ自体にも、そのことは不可能であると思われるからである。⁽⁷⁾

- 4 だがつぎに、もしも〈数学の対象よりも〉より先であって、より優れている、ある別の实在が存在するものとすれば、それは数的にみて、⁽⁸⁾ または種的に、また類的にみて、単一の实在であるか、否か、という問題を説明するべく、試みなければならない。ところで、その別の实在は、原理としての本性を有する以上、僅少のもの、そして特異なるものの、うちのみ見出される、と考える方がより妥当である。もっとも、その实在は第一の存在とか第一者とかのうちに見出される、というのであれば、いざ知らず。そこでわれわれは、別の实在とはなんであるのか、またそれがいくつかあるとするならば、なにとなにであるのか、という問題を、類^{アナロギア⁽¹⁰⁾}比によったり、また他の類似〈類似性〉によ

比較方法〉を用いたり、とにかくなんらかの方法によって、解き明かすべく試みるべきである。その実在を把握するためには、多分われわれは、それが有するある種の能力とか、その他の存在を凌いでいるその優越性とかを手がかりとしなければなるまい。丁度、われわれが神⁽¹¹⁾を認識する場合には、そうするように。おもうに、ありとあらゆるものの存在と持続との原因である万物の原理とは、神的なものであるからである。だが、このように説明を与えることは、おそらく、容易なことかも知れないが、より一層明確に、またはより一層説得力のあるように説明することは困難である。⁽¹²⁾

- 5 さて、原理はこのようなものである以上、それは感覚の対象とは關聯があるわけであり、そして自然は概括的に言って運動しており、しかも運動こそ自然の特有性なのであるから、それ故、明らかに、われわれは原理を自然の運動の原因として立てるべきである。しかし、原理はそれ自体としては不動であるから、原理が自然的物における運動の原因として立つ所以は、決して原理が他者から動かされることに基くのではなく、畢竟、〈原理それ自体にそなわった〉なんらかほかの、より優れたより先の能力に基いていることは明白である。ところで、欲求の対象の本性とは上のようなものであって、この本性に由来して、連続^{ト・オソフ}不断の円運動が生じている。従って、運動の原因として、かの欲求の対象〈不動の動者〉を立てることによって、自ら運動することにより、その結果として他者を運動させるもの〈運動する動者〉のほかには運動の原理はあり得ない、とする主張は、⁽¹³⁾解き去られるものと思われる。
- 6 以上の議論は、これまでのところは、ほぼ首尾一貫しているようである。⁽¹⁴⁾つまりそれは、万物を支配する一つの原理を立てるとともに、原理の現実活動態や本質についての説明を与えており、しかも、その原理を分割され得る、一定の量をもったもの〈つまり質料的な存在〉として説明することはない。むしろ逆に、原理を絶対的に高め上げて、より優越的なより神的な、ある領域にそれをおいている。けだし、われ

われは、分割され〈構成部分に〉区分されるという属性を、〈単に消極的に〉原理から排除すべきであるよりも、むしろ、上述の如くに説明を下すべきなのである。つまり、われわれが原理について論ずるに当っては、そのように言明する方が、より高等であると同時により真理にもかかっているからである。

II

〈第一の動者に対する志向の問題について〉

- 7 だがすでに、われわれは次の問題として、かの志向^{エフェシス(1)}に関して、さらに議論を進める必要がある。すなわち、それはどのような性質の志向⁽²⁾であって、またなにをその対象とするのか、という問題である。というわけは、円運動を行なうもの〈天体〉は数多く存在して、それらの運行はある意味では相反しているし、また、その運行が無限に終結せぬこととか、なにを目的としているのか、とかは明瞭でないからである。実際、もし〈志向の対象である〉動者⁽³⁾がただ一つであるならば、あらゆる天体が必ずしも同一の運動を行なっていないのは、奇妙なことであるし、また、もし動者は各天体ごとに別々に存在して、運動の原理は複数であるならば、それでは、「あらゆる天体が〈それぞれの〉最善とする欲求^{オレクシス}に従って進行する際に生ずる諧調〈いわゆる天球の旋律〉」というものも、決して明白なことではなくなるからである。
- 8 さらに、天球^{スファイラ}〈天球層〉の数について、その原因をより詳細に論ずることが要求される。天文学者たちの説明では十分でないからである。それにまた、天球は〈不動の動者に対して〉本性的な欲求を有しているにもかかわらず、一体どうして、それは静止を追求せずに、運動を追求しているのか、ということも理解し難い。ところで⁽⁴⁾、原理として「一」^{ドイヘン}を唱える人々も、また数を唱える人々も同様に、自然的事物が運動することと、自然的事物が〈不動の原理である〉「一」やまた数を模倣することとを、なぜ同時に〈矛盾なしに〉主張し得るのであろうか。というものは、数を原理とする人々自身も、数は〈やはり、さらに〉「一」を模倣

する、と称しているからである⁽⁶⁾。また、もし志向は、なかならず最高^{ト・アツ}善に対する志向は、魂に伴なうものであって、そしてもしもこのことが類似的なまた比喩的な意味合で言われるのではないとすれば⁽⁷⁾、運動するものは〈志向を有している以上は〉もとより魂を有するわけである⁽⁸⁾。だが、魂には同時に運動もまた〈その本質として〉属していると思われる。なぜなら、魂はそれを有するものにとっての生命であり、そして丁度動物の場合の如くに、それぞれの対象に対する欲求もまた、この生命〈たるところの魂〉によって生ずるからである。というのは、⁽⁹⁾感覚ですら、それは〈身体⁽¹⁰⁾の感覚器官が〉外的な事物による触発をうけて生ずるにもかかわらず、しかもやはり魂のうちに生起するからである⁽¹¹⁾。

- 9 ところで、もし^{ト・フオートン}第一者〈第一の動者〉が円運動の原因であるとすれば、第一者は決して最善の運動をひき起す原因ではないことになるであろう。なぜなら、魂の運動の方が円運動よりもより優れており、そして、⁽¹²⁾なにものにもまさって最も優れている運動とは、思考の運動であって、この思考の運動に基づいて、〈第一者に対する〉あの欲求もまた生ずるからである。

あるいはおそらく、次の点もまた問題とされるかも知れない。⁽¹³⁾すなわち、なぜ円運動を行なうもの〈もろもろの天体〉のみが〈第一者に対する〉志向を有しており、〈宇宙の〉中心の周辺にあるもの〈つまり地上の事物〉は、運動可能であるにもかかわらず、その志向を有しないのはなぜか。⁽¹⁴⁾それはつまり、中心周辺のものには志向をもつだけの能力がないためか、それとも、第一者の力がそこにまでは達しない、という理由によるのか、という問題である。けれどもしかし、もしも、第一者の力が微弱なためである、とするならば、この説明は如何にも奇妙である。けれど、第一者は「大地もろとも海原もろともに引きずり上げてやる。」⁽¹⁵⁾と豪語している、かのホメーロスのゼウスよりも、より以上に威力があるものと当然考えられるであろうから。それで、結局、中心周辺のものは、第一者をいわば受容し得ないものであり、それを認

識し得ないものなのである、と考えるよりほかはない。

- 10 だが、これよりも先に、おそらく、次の点が問題にされるかも知れない。すなわち、中心周辺のものとはどんな状態にあるのか、それは天界を構成する一部分をなしているのか、それとも、なしてはいないのか、また、もし天界の一部分をなすものならば、それはどんな具合に部分を占めているのか、という問題である。つまり、前述の説明によれば、中心周辺ものは、最も責ばるべきものから、単に空間的にいわば懸隔があるばかりでなく、もしも円運動こそが最も貴いものであるとすれば、現実活動の点においてもまた懸隔があるからである。なぜならば、中心周辺ものは、天界の行なう円形の周行によって左右され、いわばその単なる付帯的な結果として、場所の移動を行ったり、相互に転化し合ったりするにすぎないからである。⁽¹⁶⁾

また、もしも最善からはやはりまた最善が生ずるのであれば、もし天体のそれに対する受容能力の欠如がそのための妨げとなったのならばいざ知らず、天体は第一者から円周運動にまぎった、より優れたものを受容すべきはずであろう。⁽¹⁷⁾ なぜかといえば、第一の最も神的なるものは、あらゆるものの最善を望むものである、に違いないからである。⁽¹⁸⁾ しかしおそらく、こう主張することはいわば行き過ぎであって、これは探求しえない問題かも知れないのである。⁽¹⁹⁾ というわけは、こうした主張によれば、ありとあらゆるものは些少の差別をしか有しないか、あるいは全くなんらの差別をも有することなくして、当然、すべてが同質一様であるべきであり、最善のものに属すべきはず、となるからである。⁽²⁰⁾

- 11 また、第一の天界そのものに関しては、たぶん次の点が疑問とされるであろう。すなわち、その周行は第一の天界の本質に属するものであって、それを休止すると同時に第一の天界は消滅するものであろうか。それとも、あるいは、もしその周行が志向とか欲求とかに基づくものならば、それは〈第一の天界にとっては〉単に付帯的なことである。⁽²²⁾

にすぎないのか、という問題である。もっとも、欲求する働きが第一の天界には本来的に具わっているとすれば別であるし、また、存在するものうちに、なにかこういう類のものがあるとしても、なんら差し支えはないのである。⁽²³⁾しかし、この欲求のことはおくとして、⁽²¹⁾天界の運動そのものに関して、多分また問題にされるのは、もしも運動が取り除かれてしまうならば、それは天界の消滅を来たすものか、否か、ということであろう。

III

〈原理に基づいて行なわれる演繹について〉

さて、以上の問題は他の論究において取り扱うべきものであろう。⁽¹⁾だが、それはとにかく、上述の原理から、または諸原理から出発して、(また、以上のほかにも、原理が立てられるとすれば、おそらく、その他の諸原理から出発して、)われわれは、当然、原理に続いて派生すべきものをば、条理正しく演繹して説明するべきであり、ある点まで進んだままで、中止すべきではない、と考えられる。けだし、これは達識深慮の人にして、能くなし得ることなのであって、アルキュタスの言によれば、エウリュトスが算数用の小石などを置き並べつつ〈そのようにして事物の形態を写すことによって〉成しとげたところである、と伝えられている。すなわち、彼エウリュトスは、この数は人間の〈本質を現わすべき〉数に当ってをり、またこの数は馬の、またこの数はしかじかのもの数に当っている、と説いたということである。⁽²⁾

- 12 だが、実際、大部分の人々はある点まで進むと、それ切り中止してしまうのであって、それは「一」と不定の二を原理にしている人々といえどもまた、同然なのである。⁽³⁾つまり、彼等は〈原理としての「一」と不定の二に基づいて、イデアとしての〉数・平面および立体をつくり出したなら、それ以外のものは殆んど捨て去って顧みず、ただ僅かに次の点を取り上げて、こう説明しているにすぎない。すなわち、あるも

のは、たとえば場所とか空虚とか無際限とかは、⁽⁵⁾不定の二から生ずるのであり、またあるものは、たとえば魂とかその他のものは、数や「一」から生ずる、という具合である。そうして彼等は時間と天界とその他より多くのものを同時につくり出しているが、しかし、天界とかその他のものとかに関しては、なんらそれ以上に言及するところがないのである。⁽⁶⁾スペウシッポス学派の人々もまた同様なのであって、その他の人々の間にあっても、⁽⁷⁾ただひとりクセノクラテスのみを例外としている。つまり、この人はありとあらゆるものに対して、すなわち、感覚の対象も、思惟の対象や数学の対象も、さらにまた神的なるものをも、すべてを同様にとり上げて、宇宙におけるそれぞれの位置を、とにかく割り当てているからである。⁽⁸⁾

- 13 ⁽⁹⁾ヘスティアイオスもまた、ある程度まで、それを試みており、上述の如く、ただ第一の存在について論ずるのみに、終わってはいない。ところで、プラトンは事物を原理へ帰着せしめるに当って、原理以外のもの〈すなわち感覚の対象〉をも取り上げているように思われよう。すなわち、彼は、それらのものをもろもろのイデアに帰結させ、イデア⁽¹⁰⁾を数に帰結させ、この数から原理に到達し、それから次にはく上とは逆に⁽¹¹⁾生成の順序に従って、既述したものにまで及ぶ、という具合である。けれども、他の人々は原理のみを取り上げているにすぎない。また、人によっては、事物の真理性をもこうしたもの〈原理的なもの〉のうちにくのみ在り、と⁽¹²⁾認めるものも若干ある。というのは、この人々が存在するもの〈の实在性〉を認めるのは、それが原理にかかわっている限りにおいて、なのであるから。さて、この点は学問研究の他の分野⁽¹³⁾における場合とは、事情が逆になっている。つまり、その場合には、学問のうち根本原理から派生する部分の方がより有力であり、またいわばより完全だからである。⁽¹⁴⁾そしておそらく、⁽¹⁵⁾こうした相違のあることも道理であろう。なぜなら、この〈形而上学の研究〉場合には、われわれは根本原理を探求の対象とするのに対して、これ以外の学問の

場合には、われわれは根本原理から出発して〈原理自体を前提とした上で、それ自体を直接には取り上げることなしに〉探求を行なうわけだからである。

IV

〈原理の規定性に関する問題〉

- 14 そこで、われわれは一体どのような方法によって、またどのような性質のものとして、原理を勘案すべきか、ということがおそらく問題となるであろう。つまり、原理は無形体的であり、いわば可能態としてあるものにすぎないのか。(丁度、火や土を原理とする人々がそう考えるように。)⁽¹⁾それとも、原理は、プラトンがティマイオス篇で述べている如く、⁽²⁾何ものにもまさって明確な規定を有すべきものであるから、それはすでに形体を有している、とすべきか。けだし、最も貴い存在にとっては、秩序や規定性こそ、それに具わった最も固有の本性であるべきはずなのであるから。それにまた、形而上学以外の学問においても、この事情はほぼ同様である〈それらの原理は規定的なものである〉⁽³⁾と思われる。たとえば、文法学や音楽や数学的諸学科の場合のように。そして、原理から派生するものはまた、原理の規定性に随従して〈それによって形成されて〉いるのである。さらにまた、まさしく自然を模倣している⁽⁴⁾技術的知識の場合にも、この関係は同様なのであり、それは使用する道具の点でもその他の点でも、原理に依存している。⁽⁴⁾ところで、原理はすべて形体〈形相〉を有している、と考えるものもあるが、⁽⁵⁾また一方では、質料的原理のみを立てるものもあり、⁽⁶⁾あるいはまた、⁽⁷⁾完全なる存在はこの両者から成り立っている、との理由によって、形体をもった原理〈形相的原理〉と質料としての原理との両者を共に認める人々もある。⁽⁸⁾つまり、この人々は、実在全体はいわば相対立するものから構成されている、と考えるわけである。⁽⁹⁾
- 15 しかし、全天界とその部分の各々は、みなことごとく、形体的にも能力的にも週期的にも、秩序整然として規則にしたがっているにもかか

わらず、原理においては〈原理それ自体にあっては〉このようなことが全く認められず、ヘラクレイトスの言うように、「この至美なる宇宙もさながら〈その人々にとっては〉がらくたにして屑の山のごとし。」⁽¹⁰⁾とするならば、かの質料的原理のみを立てる人々といえども、それは道理に合わぬことだと思ふであろう。しかも彼等は、無生物におけると生物におけるとを問わず同様に、それらのいわば最も微細なものに及ぶまでも、上述のような〈それらは規則的であると〉見解を取っている。つまり、個々の事物の本性は、たとえそれが自然発生的な下等動物⁽¹¹⁾の本性であろうとも、いわば明確に規定されているのに、しかし原理の方は無規定的なのである、と彼等は考えるからである。

しかしまた他方において、動物や植物や、さては泡⁽¹²⁾のはてに到るまでも、ありとあらゆるものにわたって、それらを目的因に結びつけながら、⁽¹³⁾各種類ごとにそれぞれの概念規定を割り当てることは困難である。もっとも、もし空中や地上の森羅万象はみなことごとく、ほかなる存在⁽¹⁴⁾の秩序や変化に基づいており、その結果として生ずるものである、とするならば、別であるが。そして、この点に関するまさに絶好の例証として、四季の移り変りによって生ずる現象を引き合いに出すものがある。つまり、この人々は、動物も植物も果実も、太陽があたかも生みの親たる役割を果すことによって、四季⁽¹⁵⁾の変化に⁽¹⁶⁾応じて生成する、と考えるのである。このような問題については、このあたりで吟味を加える必要がある。すなわち、秩序は〈この宇宙の〉どの範囲にまで行きわたっているのか、⁽¹⁶⁾またなぜ、それ以上には秩序づけが不可能であったり、あるいは、秩序がより悪い状態に移行することも⁽¹⁷⁾あるのか、等の諸問題について規定することが要求される。

V

〈原理の不動性について〉

- 16 だが第一の諸原理について、〈この形而上学の研究においても〉やはりまづそれから第一に論じ始めた、原理に関する問題として、また当然、

その静止性に関する問題が、問われることであろう。⁽¹⁾ 思うに、もしも静止が〈運動よりも〉より優れた状態とされるならば、静止は原理の属性であるとされるであろう。だがしかし、もし、静止とは無為であって、運動の或る欠如態にすぎない、とされるならば、それは原理の属性とはされないであろうし、むしろ、その属性としてならば、われわれは静止に替わるべきものとして、現実活動を〈運動よりも〉より優先的なより貴い属性として、これを〈運動の〉換わりにあてるべきであり、そして運動をば感覚の対象のうち認めるべきである。だがしかし、動者は、いついかなる場合にも、それ自身が運動の状態にあることは出来ないわけであるから——なぜかといえば、もしも動者自体が運動するならば、それは〈もはや〉第一の動者ではありえないことになるから——という少くとも以上の理由によって、原理たるべき動者は静止を保っている、と主張することは、単なる言葉の上だけの議論にすぎないのではないかと疑われるし、また別の面から考えても、それは信ずるには足りない議論であるから、むしろわれわれはなんらかのより確実な根拠を求める必要がある。ところで、これは感覚〈感覚によって認められる事実〉にもある意味では適っていると思われるが、動者とそれが運動させる対象とは、相互の間に能動と受動との区別がある以上、必ず別個の存在でなければならぬ、というわけのものではない。⁽²⁾ さらにこのことは、理性そのものとか神とかにあてはめて考える場合にも、やはり成り立つべきことである。⁽³⁾ しかしまた、それとは別の主張として、静止しているものを欲求するものが、欲求される対象の有する静止性を模倣することはない〈つまりそれらは静止せずに運動している〉、という説明も、これもまた奇妙な考え方である。つまり、こう主張する人々は、なぜ、不動の動者以外のものの静止が、〈それらのものの欲求の対象である〉不動の動者の静止性に随伴して生ずる、とは考えないのであるか。ただ、多分われわれは、全世界を部分なき存在に帰するような見解には、⁽⁴⁾ くみするべきではなく、否、むしろわれわれは、これこそ

最も完全無欠なるものと称せられる全天界とは、能う限りに自己調和的なものであり、またそれは、国家とか動物とか、またなにか部分から成り立っている他のものなどのように、組織的に構成されているものである、と考えるべきであろう。⁽⁷⁾

VI

〈質料と形相について〉

- 17 次のような問題に関してもまた、若干、論ずる必要がある。存在する事物の質料と形相とへの区分は、一体いかなるものなのか。われわれは、形相は存在であるのに対して、質料は非存在であり、単に可能態における存在であるにすぎず、現実活動態に達する過程にあるもの、と考えるべきであろうか。あるいはまた、質料は存在ではあるが、しかし、あたかも技術において使用される材料の如く、無規定的な存在なのであり、そして事物が生成する場合には、〈この無規定的な質料が、〉その事物の概念規定に応じて形体を与えられることによって、生成する事物の実在性は成り立っている、と考えるべきであろうか。だが、このように考えるならば、質料は形体を与えられることによって、おそらくより優れた状態へとうつり変わることになるであろうが、しかし、その事物は質料としての限りにおいては、まさしくすでに存在していたはずである。（もしも、もともと質料が存在しているのでなければ、事物の生成はあり得ないからである。）しかし、そのような存在とは、ある可能態を有するのみであって、形相という点では規定されていないものなのであるから、具体的な個物でもなければ、一定の質や一定の量を有する存在でもないのである。そして一般的に、われわれが以上の問題を理解するためには、われわれは技術との類比にたよるべきであり、また、なんらかほかの類似性があるならば、それによって理解すべきである。

VII

〈善と悪について〉

- 18 もしも実際、それが余計な詮索ではないとすれば、次の問題にもまた、解決困難な点があるように思われる。すなわち、一体なぜ、自然は、つまり万有の存在全体は、相反するものから成り立っているのか。また悪も善にほぼ匹敵するだけの地歩を占めているのはなぜか。否、むしろ悪の方が遙かに優勢であり、従って、エウリピデスの言う「好事魔多⁽¹⁾し」⁽²⁾とは、また普遍的真理を道破したものとも考えられるほどであるが、それはなぜか、などの問題である。だが、こういう議論は、あらゆるものがことごとく善なでもなければ、またことごとく同質一様でもないのはなぜか、とか、また「存在する^{ト・エイン}〈……ある〉」はすべてのものについて述語されるのに、しかも、すべてのものの中には、白いものと黒いものとの間におけるように、互に同質一様なものがなんら存在しないのはなぜか、と尋ねると、あまり逕庭のない議論である。さらにまた、より一層逆説的なのは、存在は相反するものを含まなくては、決して成り立つことが出来ない⁽⁴⁾、との見解であり、さらにより一層逆説的な見解を取るものとして、現にあらず、かつてもあらず、未だにあらざるもの〈すなわち空虚〉をさえ、万有の本性のうちに入れて、ともに数え上げている人々⁽⁵⁾がある。だがしかし、こうまでするのは、⁽⁶⁾理知の行きすぎとでも言うべきであろう。

VIII

〈存在と学的認識の多様性について〉

- 19 しかし、存在の意味が多様多義であることは明白である。なぜならば、われわれは感覚によって種々の差別を観察して、その原因を探求するからである。だが、おそらくより真実な言い方をすれば、われわれは、感覚によって直接に探求したり、あるいは疑惑を喚び起された

りして、思考の働きを促がされるのであって、たとえ思考がより先に進み得ない場合であっても、われわれがさらに探求を続けて行くならば、その疑惑を通して、無明の中にも尚かつある光明が明らかである⁽¹⁾。したがって、なんらかの差別がないならば、学的認識は成り立たないのである。実際、事物が互に別個の存在であるならば、そこにはなんらかの差別があるわけであり、また普遍的な存在においても、たとえその普遍的なものが類であろうと種であろうと、普遍的な存在のもとには数多くのものが含まれている以上、それらのものはやはり必然的に差別があるに違いないからである⁽³⁾。

- 20 そしてまた、殆んどすべての学問は事物の特有性を対象としている⁽⁴⁾。それはつまり、それぞれの事物において、その実体とか、そのト・テイ・ーン・エイナイ^{ウーゾフ}本質とかは、それぞれに特有なものであるし、また、われわれが事物の自体的で非偶有的な属性であるとして認めるものは、ある特定の事物のある特有の性質として、常に認められるものであった、のだからである。だが、一般的に言って、学問のなすべき仕事は、多数のうち⁽⁵⁾に在る同一性を識別することである。もっとも、これには、共通的・普遍的意味における同一性もあれば⁽⁶⁾、あるいはまた、それぞれに關して幾分特有な意味の同一性、たとえば数と線分との場合の同一性とか、動物と植物との場合に認められる同一性などもある⁽⁷⁾。そして、この二様の同一性を共に含んでいる学問こそ完全な学問なのである。しかし、ある場合には、学問は普遍を目的としているが（つまり、その学問が求める原因は普遍のうちにあるわけだから）、しかし他の場合には、すなわち、丁度実践的なものや制作的なものの場合の如くに、そこでは〈対象の〉区別が不可分の個体にまで及ぶもの場合には、それらを対象とする学問は個別的なものを目的としている。なぜなら、そういうものの現実態は個別的だからである⁽⁸⁾。

- 21 われわれは〈対象の間に存在している〉本質的・数的・種的・類的・類比的な意味での同一性を、また、もしも以上のほかに同一性の区別が

あるならば、その意味での同一性を、用いながら、学的認識を行なっているが、類比的な意味での同一性が最も広範囲に亘るものである。つまり、この場合に対象と対象との間の隔たりが最も大きいように思われるからであって、⁽⁹⁾ そう思われる理由は、あるいは、われわれ自身のせいでもあり、あるいは逆に、対象となる基体〈物体そのもの〉のせいでもあり、あるいは同時にこの双方に基づくのである。

- 22 学的に認識するということは多種多様であるが、われわれは各々のものの認識を、どのように進めて行くべきか、という問題において、その出発点でもあり最も肝要なことは、〈それぞれの対象に応じて〉固有適切な〈認識の〉方法を用いる、ということである。⁽¹⁰⁾ たとえば、われわれは第一の存在すなわち思惟の対象と、可動的で自然の領域に属する事物とを区別し、またさらに、後者そのものを、はじめに位するもの〈天体〉とそれに従属的なものとに区別して、以下、動物・植物、最後には無生物にまで及んで、⁽¹¹⁾ それぞれの対象に応じつつ、固有適切な方法を取るべきである。なぜなら、丁度数学の対象の場合のように、⁽¹²⁾ 学問の対象には、それぞれの種類に応じて、なんらかの特有性が存在するからである。

- 23 そしてまた、数学的諸学科そのもの間においてさえ、それらはほぼ同種類に属すると言ってよいものでありながら、そこには差別があるわけだが、⁽¹³⁾ これはすでに十分に識別された〈われわれにとっては周知の〉事柄である。また、ある人々の主張するごとく、不可知なるものであるという、まさにその点において可知的なるものもあるのだとすれば、⁽¹¹⁾ 〈それを認識するべき〉このような方法は、それに特有なものであろう。そしてわれわれはこの方法を他の方法からいささか区別する必要がある。だがしかし、あたかも目に見えないものは、見えない〈目には見えないものと見られている〉というまさにその点で見られ得る、と説く議論のように、それは不可知のものであることが知られるまさにその点において可知的なのである、と説明するよりも、むしろ、不可知なるも

のを、もしそれが可能な場合には、〈なんらか可知的なるものとの〉類比を用いることによって説明する方が、おそらく、本来より適切な取り扱い方であろう。⁽¹⁵⁾だが、それはともかくとして、われわれは、学問の方法にはどれだけあり、また認識する仕方はいく通りあるのか、ということを識別するべく試みるべきである。

24 だが、この問題自体を解決するための端初であって、第一になすべきことは、学的認識とは何か、を規定することである。けれども、それはなかなか困難なことである、と思われるかも知れない。(なぜなら、様々の意味で用いられている言葉について、そのうちになんらかの普遍的かつ共通的な要素〈その本質的規定〉をとらえることは不可能だからである。)それ故、感覚の対象においても、また思惟の対象においても同様に、われわれがどの点まで原因を尋ね、また、なにに関して原因を求めるべきか、ということを決めるのは、解決の困難な問題であり、あるいは、とにかく容易には答え得ないことなのである。というわけは、感覚の対象と思惟の対象とのいずれを研究する場合であっても、原因を尋ねて無限に遡る行き方〈無限背進論法〉は妥当ではなく、思慮をうばいさるものだからである。つまり、思惟の対象も感覚の対象も、この両者はともにある意味では出発点なのだからである。おそらく、後者はわれわれにとっての出発点であるし、前者は絶対的な意味での出発点であり、⁽¹⁶⁾または、前者は究極目的であって、後者は〈それに到達するための〉われわれのある意味での出発点であろう。

25 ところで、われわれは感覚にもとづいて研究を開始して、ある点までは因果関係を尋ねつつ考察をおし進めることが出来る。⁽¹⁷⁾けれどもしかし、われわれが感覚の対象から、頂点に位する第一の存在それ自体へと移り変わって行くときには、もはやそのことは不可能となる。その理由は、第一の存在は〈自己自身以外には〉原因を有しないがためであり、また、いわば最も光彩陸離たるものを注視するためには、われわれの力があまりにも微弱なためである。だが、こうした第一の存在に対

テオフラストス「形而上学」研究

する観照は、^{テオリア}理性それ自身によって、^{ヌクス}理性が直接それに触れて、いわばそれをつかむことによって行なわれる⁽¹⁸⁾、と説明する方が、おそらくはより真実であろう。この故にこそまた、第一の存在に関しては、錯誤を犯すことはありえないのである。

26 だがまさにこの点に関して理解と確信とを得るのは困難である。そのわけは、他の場合にもまた肝要なことなのであるが、個別的な研究に関して、また最も重要な研究に関する場合にはとりわけ肝要なこととして、われわれは、どこにその限界をおくべきか、を知ることが必要だからであり、すなわち自然の研究に関しても、またそれよりも優先的な研究〈形而上学〉に関する場合にも、それは必要なことだからである。というわけは、ありとあらゆるものに関して論拠を要求するのは、かえって論拠をうばいさり、同時にまた認識する働きをもうばいさることだからである。むしろ忌憚なく言えば、そういう人々は、論拠を有してもいなければまた本性上有しないはずのものごとに関して、論拠を求めているのである。

27 しかし、天界を永遠であると考えて、さらに、その運行や大小・形状・間隔等に関する問題とか、その他天文学の証明する諸問題を取り上げて考察する人々は、さらに、自分たちになすべく残された問題として、第一の動者たちや⁽¹⁹⁾それらの目的因について論じ、また、それら各々の本性や相互的位置や万有一切の実在などのいかなるものであるかを説明し、また下って、個々の存在に及んでは、その他のものどもを種類別に各部分ごとにそれぞれ取り上げて、⁽²⁰⁾ついには動物や植物にまで到るべきである。ところで、天文学は、われわれの学問の一翼を担うものであるにしても、しかし、自然の第一の存在⁽²¹⁾に関しては寄与するところがあるわけでないとするれば、〈われわれの当面の研究対象である〉最も支配的な存在は天文学の対象とは別個のものであり、またそれよりもより先に位する存在であるだろう。というのは、実際〈形而上学〉その研究の方法でさえも、ある人々の考えるように、自然学の研

究方法とは異っているし、もしくは、自然学のそれに尽きるものではないからである。⁽²²⁾しかしながら、運動することこそ自然一般にとって、またとりわけて天界にとって、固有なものである。⁽²³⁾それ故、またもしも、現実活動性はそれぞれの自然的事物の本質に属するものであり、個々の事物は、現実活動態にあるときには、また運動してもいるわけである、あたかも動物や植物における場合の如くに、(もしもそれらのものが運動していないならば、単に名目ばかりの動物や植物であるに過ぎない。)とするならば、天界が周行を行なっていることも、明らかにその本質に従うものであって、もしも周行から離れて静止するならば、単に名目ばかりの天界であるにすぎないであろう。けだし、周行は万有の生命とも言うべきものだからである。

- 28 そこで、もし、とにかく動物の場合には、生命の理由を尋ねることは必要ではないか、もしくは、丁度今述べたように〈その本質に属すべきものとして〉説明されるべきである、とするならば、天界やもろもろの天体における場合にも、われわれはその運行について理由を尋ねる必要はないか、または、なんらかの特定の方法によってそれを説明すべきではなからうか。⁽²⁴⁾そして、いま述べたこの困難な問題は、不動のもの〈不動の動者〉によってひき起されるところの運動の問題に対してもまた、ある意味で関係するところがある。⁽²⁵⁾

K

〈目的論的解釈の限界について〉

あらゆるものはなんらかの目的のために存在しており、如何なるものも無用の存在ではない、という見地をとるためには、しばしば説かれるように、一般的に言って、ものの目的因を規定するのは容易なことではない。(われわれはどこから出発して考察を始めるべきであり、如何なる目的因にまで到達したときに、それを終えるべきなのであるうか。)しかも、またさらに、ものごとによっては、なんらかの目的を有

するとも思われず、あるいは偶発的に、あるいはある必然性によって、生ずるように思われるものも、いくらか存在している。それは丁度、天空の現象や、地上の数多くの事象に認められるようにである。それ故、特にこういう場合には、目的因を規定することは容易でないのである。

- 29 実際、海の潮汐の干満⁽¹⁾とか、また早魃や湿潤など、一般的に言って右変左化・消滅・生成などの諸現象⁽²⁾や、その他のこれに類する少なからざる諸現象など、それらはすべてなにを目的としているのか。さらに、動物においてすら、無用の長物の如きものがある。たとえば、雄にも乳房があるし、雌の場合にも、もしもこれが何の用もはたさないものならば、排出の現象が認められる。また、ある動物に生える鬚とか、一般的に言って身体のある個所に生ずる毛などもそうである。さらにまた、大きすぎる角などもその一例であって、たとえば鹿の角が（ものに擦れたり、樹木に引掛ったり、眼に覆い被さったりなどして、害を与えこそすれ）なんの役にも立ちほしない場合などである。また、時には、あお鷺の交尾とか、〈その日限りの〉かげろうの命などに見られるように、無理強いな、自然に反する現象すら認められて、その類例はほかにも決して少なしとはしないのである。

- 30 そうしてその最も適切で顕著な事例は、動物の栄養や発生に関係して認められるものである。というのは、それらには、なんの目的も持たず、単に偶発的であるにすぎず、別の外的な必然性によっているものがあるからである。なぜなら、もしもそのことが当の動物のために営まれるものであるならば、それは常に一定であり不変でなければならぬはずであるから。さらに植物の場合においても、また、形体や形相や可能態などの点から見てなんらか一定の本性を有するものと思われる無生物の場合にあってはより以上に、これらの事物はなにを目的としているのか、ということが問題にされるであろう。（なぜなら、こういう事物は〈原因の〉説明を有しない、という主張そのものが通用し難いものであるし、まして、これとは別のより先でより貴い存在に関し

ては、上のような見解を取らないとすれば、なおさらそうであるから。それ故、こういう事物は、結局、自己偶発的に、または宇宙の周行によって、ある形状を呈したり、相互の差別をもったりするのだ、という説明⁽⁸⁾にも幾分かは信ずべき点があろうと思われる。

- 31 だが、もし⁽⁴⁾こういう事物には目的などないとすれば、われわれは、合目的性とか最高善への欲求に対して、ある一定の限界をおくべきであり、それをあらゆるものに関して無条件に認容してはならない。というわけは、それが無条件的に述べられるにせよ、個別的に述べられるにせよ、次のような主張には、多少疑問の余地があるからである。すなわち、無条件的に言って、ありとあらゆるものにおいて、その本性は最高善を欲求しており、可能な限り、あらゆるものをして永遠と秩序とに与らしめる、と考えるべきである。また他方、個別的に言えば、動物に関する場合にも、全くそれと同様に考えられるのであって、なぜかという、より良い状態をとることが可能な際には、その場合には必ずそれが実現されているからである。たとえば、気管は食道の前方に（ここがより貴い位置であるから）置かれているし、また血液の混和は心臓の中央心室において最も優れているが、それは中央が最も貴い部分だからであり、それにまた〈身体に附属する〉装飾のための部分は、すべて同様にして説明される、という主張である。

- 32 〈ところで、以上のような説に対して、疑問の余地があるというわけは、〉たとえば〈自然の本質的な〉欲求そのものは上述の如くであるにしても、しかしとにかく、明らかに善に従いもしなければ、善を受け容れもしないものが事実上数多く存在しており、むしろ、はるかに大多数を占めているからである。つまり、生物は少数にすぎないけれども、無生物は数限りなく、そして生物自体の中ですら、それが存在する方が、しないよりも、より望ましいものは、僅少にすぎないのである。⁽⁵⁾だがしかし〈存在全体を〉総体的にみるときにも、善はきわめて稀なものであって、少数のものの中のみ認められるにすぎないが、悪の存在たるや甚だ

多数を占めており、しかも悪はただ無規定性のうちのみ存在したり、またいわば質料のようなものとして、あたかも自然的事物の場合の質料にあたるもの〈単なる消極的な原理〉として、存在するのみには止まらないのである、〈つまり、存在におけるより積極的な原理として、悪が認められるべきである。〉などと主張することは、全く無学なものすることである。⁽⁶⁾つまり、存在全体に関して論じている人々の説は、いい加減なものにすぎないのであって、それは丁度スペウシッポスが、高貴なるものは稀少にすぎず、宇宙の中心部を占有するのに対して、⁽⁷⁾その他のものどもが、それをとりまいて周辺部を形作っている、とするようなものである。いや確かに、存在するものの本来の在り方はよいものなのである。

- 33 プラトンやピタゴラス学派の人々は、思惟の対象と感覚の対象との間に大きな懸隔を設けているが、しかし彼等は、ありとあらゆるもの〈あらゆる感覚の対象〉は思惟の対象を模倣しようとする、と考える。とはいえ、彼等〈プラトン学派の人々〉は「一」と不定の二との間に、まさに一種の対立の如きものを置いて、そしてこの不定の二には、無限定や無秩序や、またいわばあらゆる無形体性などが、本質的に属している、と考えるわけであるから、彼等にとっては、不定の二がないならば、宇宙全体の本性は決して成り立ち得ないことになる。むしろ彼等は、それがもう一方の原理〈すなわち「一」〉といわば対等の立場を占めているか、あるいは、さらにこれを凌いでさえいるものとする。従って彼等は、原理すら互に相反している、と考えるわけである。⁽⁸⁾こういうわけであるから、神に究極の原因を帰する人々がみな、たとえ神といえども、あらゆるものを最善の状態に導き入れることは不可能なのであって、よしんばそうするにしても、可能な範囲内にも限られている、と考えるのである。そして存在全体は、そもそも相反するものから成り、相反するものの上に成り立っている以上、もしも存在全体をうばいさるような結果を招くとすれば、万物をしてすべて善たら

しめることは、おそらく神の嘉^よしとし給うところでもあるまい。

- 34 そして第一の存在の間においてもまた、地上の変化に関して述べられた⁽⁹⁾現象のような、偶然的な成りゆきも明らかに数多く確認されるのである。なぜならば、そこには、より善い状態〈への変化〉も、目的因も認められず、それらは強いて言えば、ある種の必然性に従っているように思われるからである。そして、このような事象は、大気中にもその他にも、数多いのである。しかし、少くとも秩序の点において最も優れていると思われるものは、感覚の対象の中では天体であろうし、他方、思惟の対象の中では数学の対象であろう。(もっとも、これが、天体よりも、秩序の点において優先しているのは、勿論のこととして。)つまり、数学の対象においては、秩序が、たとい全体をではないにせよ、大部分をしめているからである。ただし、〈数学の基本的な要素としてのいくつかの〉形体をば、デモクリトスが原子について想定しているような性質のものであるとは考えない限りにおいてである。

さて、とにかく、以上がわれわれの考察すべき問題である。けれども、最初から述べられたように、自然においても、また万有一切の存在においても、そこに合目的性とか、より善なるものに対する衝動を認めるにあたって、われわれはある限界を設けるべく努めなければならない。けだし、これこそが万有一切の研究の、すなわち、存在するものが成り立っている条件やまたそれらのものの相互的關係を尋ねることの、はじめだからである。

本書の存在は、アンドロニコスおよびヘルミッポスには知られていない。彼等のテオフラストス著作目録の中に、これは全くとり上げられていないからである。しかし、ニコラオスはその「アリストテレス形而上学の研究」の中で、本書に言及して、これをテオフラストスの著作である、と述べている。本書においては、〈形而上学的〉論究の全般に関するいわば先決的な難問題がいくつか取り扱われている。⁽¹³⁾

注 解

I

- (1) あらゆる存在のうちで最も根源的な、第一の原理・原因たるべきものをいう。
- (2) 以下のくだりの議論には、多少の混乱がみられる。すなわち、自然学それ自体の多様性は、その対象たる自然的事物の多様性によって、本質的に規定されているわけであるが、この多様性の両側面が、ここでは明確には区別されずに論じられている。
- (3) 以上は特にプラトン (Cf. Tim. 59 d) およびその学派の人々の説をさすものであるが、もちろんこれは、それをうけついで、アリストテレスの基本的な考え方にもなっていた。
- (4) プラトンのイデアとか、アリストテレスの不動の動者や、また天体などをも言う。
- (5) おそらくスペウシッポスやクセノクラテスをさすものであろう。
- (6) ピタゴラス学派の人々。
- (7) 以上この節 (§ 3) は、数学の対象である存在が、原理的な存在としては、十分なものではないことを、種々の観点から論じて、これを退けようとするものである。
- (8) これは、たとえば、プラトンのイデアの如きもの。
- (9) これは第一の動者のことである。
- (10) アナログイアによる探求の方法をテオフラストスは一般に学問上の方法として重視していたのであるが、また形而上学の場合には、下の注解 (12) に述べることも関係して、特に重要視したものと思われ、したがってこれについては §§ 17, 21, 23 等の諸節においても取り上げられている。
- (11) この箇所には直接の関係はないが、テオフラストスは天界 (Cf. *ὁ πρῶτος οὐρανός* 6 a6) を神として表象したものらしい。Cf. Ross,

op. cit. p. xxv f.

- (12) このように、根源的な原理を説明するに際して、彼の態度は概ね消極的であって、一応、懐疑的であるとも言えるかも知れない。
- (13) 欲求の対象とは目的因であり、すなわちそれは最高善として、それ自らは不動であるところの、他のもろもろのものに対する原動者の立場に立つもの。
- (14) つまり、かくして天体の運行が生じ、またそれに付帯して、地上の運動も生ずる、との考え方である。
- (15) 上述のようなアリストテレス的な不動の動者の説とは異ったものであって、*τὸ αὐτὸ κινῶν* のものである靈魂を運動の原因とする説をさし、プラトン・クセノクラテス・アルクマイオン等がこの考え方を取ったものとされている。なおこの問題に関するテオフラストス自身の見解については §§ 27, 28 を参照。
- (16) 前節に述べられたような議論を一応は認めて、この節でもそれを補足的に説明するわけであるが、上記注解(15)に触れたように、彼自身が取ろうとする見解は次第に展開されて来る。
- (17) 原理的存在の自然的存在とは全く異なる超越性を積極的に主張するものである。この論理の線を更に追求するならば、結局、いわゆる思惟の思惟・絶対者の自己観照にまで行きつくことになるであろう。しかしテオフラストスは次の章では、種々の観点から、むしろこの線に進むことを回避しようとしている。

II

- (1) のちプロティノスでも用いられるようになる *ἔρεσις* は、アリストテレスの用語としては、普通には *ὄρεξις* がこれにあたるもの。
- (2) 前節 (§ 6) をうけて、次にアリストテレスの説の批判に移るわけであるが、以下にはまづ、§ 5 の後半に述べられた欲求の対象と関聯して、それに向って行く自然的事物の志向とは何か、という問

題を立てる。

- (3) 以下はアリストテレスの——Met. A 8, に述べられているような——説に対する、簡略な反論となっている。
- (4) 次には、転じて、プラトン学派の説の批判に移る。
- (5) 特にクセノクラテスを指すもの。
- (6) ここは *μμείσθαι* を補って考え、この後の続き具合は、〈従って、不動の原理である「一」にならって、結局、自然的事物は静止すべきはずであるのに。〉となるべき論旨であろう。
- (7) テオフラストス自身としては、志向を持ち出してする説明の仕方には、あきたらないのであろう、と思われる。
- (8) 以下にはテオフラストス自身の見解を述べているもの。
- (9) 空間的運動の前提条件であるところの欲求もまた。
- (10) さらに、欲求の前提条件であるところの感覚ですら。
- (11) すなわち、生命の働きである感覚から欲求が生じ、欲求から空間的運動が生ずるが、魂は生命のいわば形相なのであるから、魂そのものには本来的に運動が帰属しているはずである、との考え方。
- (12) 空間的運動である天体の円運動よりもより優れている。
- (13) もしも、われわれがアリストテレスの所説の不十分な点を指摘するならば、おそらく……との意味である。しかし以下のテオフラストスによる批判は、必ずしも当ってはいないとされている。Cf. Tricot, op. cit. p. 10(1).
- (14) 天球層は、不動の動者に対する渴望を有しているために、永遠の円運動を行なっているのであるが、他方、宇宙の中央部に位置している地上の事物は、円運動を行なうことはなく、上下の垂直運動を行なうにすぎないのは、どういうわけか、と疑問を出してくる。
- (15) Homerus, Ilias, VIII, 24.
- (16) § 15 のおわり、および § 30 のおわりを参照。
- (17) § 9 のはじめの問題に関連している。

- (18) かくして、神的な摂理が全存在に及んで行きわたる、という考え方で、これはアリストテレス的というよりは、むしろプラトンのであるとされる。
- (19) §18 のおわりを参照。このような、ある点におけるいわば判断の中止は、テオフラストスの形而上学的考え方の特色の一つであると言えよう。
- (20) §18 の中ほどを参照。
- (21) これは恒星天をさすもの。なお、注解 I (11) を参照。
- (22) これはアリストテレスの考え方である。
- (23) テオフラストスは上記の考え方を捨て去り、§27 のおわりにおいて、この見解をはっきり打ち出している。
- (24) 欲求を持ち出して、天界の周行を説明することは、必要でもないのだから……という考えである。

III

- (1) この章の区切りは、便宜上、この文から始めることとする。
 以上 §11 のはじめから提出された問題にさらに立ち入ることは、天文学の分野に属するものであるとして、ここから以下においては、形而上学本来の問題に立ちもどっている。
- (2) ここではテオフラストスは、やや皮肉な調子を交えながらも、エウリュトスのやり方をその論理的一貫性のゆえに認めている。
- (3) §12 の区切りを多少移す。
 なお、本書の、これより以下 §12 と §13 の前半及び §33 の前半のくぐりなどは、プラトンのイデア数論に関する、古代の数少ない貴重な資料の一つとなっており、当然、これらは解釈上の問題点も多い箇所なのであるが、この注解においては特別には取り上げない。
- (4) プラトンおよび正統的なプラトン学派の人々をさしている。
- (5) この三語によってプラトンの空間をさすもの。

- (6) 彼等はそれ以上に更に進んで、演繹的に、根本的原理に基づいて、より派生的な存在についての説明を与えることをしてはいない、という意味。
- (7) やはりプラトン学派の内部において。
- (8) クセノクラテスの考え方によれば、存在全体は三部分に大きく区分される。つまり、思惟的ならびに数学的存在(超越的存在)、神秘的なるものたち(天界)、および感覚的事物の三者から万有は構成されているものとされる。
- (9) ペリントスのヘスティアイオス。プラトンの門下に数えられる人。
- (10) もちろん、これは数学の対象としての数をさすものではなく、いわゆるイデア数のことであろう。この箇所はイデア数に関する解釈上とりわけ問題になるところである。
- (11) ここの原理とは「一」と不定の二をさすものであろう。
- (12) §12の中ほどを参照。つまり、場所・空虚・無際限・魂・時間・天界などである。
- (13) たとえば、数学的諸学科における場合など。
- (14) より完全とはより具体的の意味であって、たとえば、点よりも線が、線よりも面が、面よりも立体がそうであるように。
- (15) たとえば、数学的諸学科においても、原理からの演繹に基づいた、より応用的・実用的な部門の方に重点がおかれている、との考え方である。

IV

- (1) 火を原理として立てている人々としては、ヘラクレイトスやヒッパソス、土を原理とするものは、たとえばヘシオドスなど、また、火と土との両者を原理とするものとしてはピタゴラス学派が上げられよう。

- (2) Tim. 30 a.
- (3) これらの学問は、それぞれが、文字、基本音階、点・線・面等を原理的な構成要素としており、それらの要素に基いて学問の領域全体が構成されている、との考え方。
- (4) これには、たとえば医学的技術の場合などが考えられる。その原理となるのは身体の健康であって、道具としては医療用品がある。この道具を適宜使用しつつ(技術)、身体の各組織を健康(形相)を実現すべきいわば質料として取扱うことによって、つまりかくしてそれを原理に依存せしめるときに、その医学は有効なものとなるのである。なお、このくだりはアナログアによる説明方法の一例と見られよう。
- (5) ピタゴラス学派やプラトン学派の人々。
- (6) たとえば、ソクラテス以前の自然学者たちなど。
- (7) 具体的・現実的な存在。
- (8) アリストテレス学派の人々。
- (9) この文を §14 に入れる。
- (10) DK, Fr. 124.
- (11) 魚類や甲殻類や昆虫などのうち、産卵によらずただ単に自然発生的に生ずると考えられていたもの。
- (12) 以上の、原理の無規定性の主張に対する批判から、転じて、以下には逆に、規定性の主張を終始一貫させることの困難さを指摘する。これも、現象に訴えることによって目的観に制限をおくものの一例である。
- (13) これは目的論的自然観で、自然界を制作過程との類比において見るもの。
- (14) これは、次の説明から察すると、天界をさすものであって、同様の考え方は §10 の中ほど、および §30 のおわりにも見られる。
- (15) この太陽の運行と季節の変化との間の関係は、エウドクソス・

テオフラストス「形而上学」研究

カリッポス・アリストテレスなどの天文学体系においてはかなり詳細に研究されている。

- (16) テオフラストス自身の解決としては、上述の相対立する二説に対して、その中間の道を取ろうとしている。
- (17) §33の後半を参照。

V

- (1) すなわち、プラトンの「一」と不定の二とか、アリストテレスの不動の動者などの原理における、それらの原理の不変不動性に関する問題である。§1の後半を参照。
- (2) 以上はアリストテレスの説を言うもので、すぐにこれに続いて、テオフラストスのそれに対する批判が述べられる。
- (3) すなわち、ここで考えられているのは、経験的にも認められる、人間や動物の行なう自発的な運動変化——そのもの自身のうちに内在している起動性——のことである。
- (4) これは能動と受動の区別を超越した、神の自己顕現としての活動を言うもの。
- (5) §8の前半を参照。
- (6) パルメニデスに見られるような、極端に一元論的な見解であって、従ってそこでは、差異も存在しなければ、運動もあり得ないことになる。
- (7) これは直接には上記の見解に対するテオフラストス自身の主張であるが——なお §10の後半をも参照——、間接的にはこの §16で立てられた設問に対する解答ともなるものであろう。

VI

- (1) 技術とのアナログアによる把握の仕方は、§14のおわりにも現れている。

VII

- (1) ピタゴラス学派にみられる考え方のように。
- (2) Aeolus, Fr. 21, 3 (Nauck).
- (3) この両者は、「…色である」という点では、つまりその性質としてそれぞれある色彩をもつ限りにおいては、類的に同一であることができるが、その色彩がそれぞれ白色と黒色とである点では、つまり種的にみるならば、全く異ったものである。
- (4) 存在は矛盾や対立を必要条件として成り立っている、というわけであるから、§18 はじめの設問や、§14 のおわりとは意味合を少しく異にするもの。
- (5) 古代原子論者たちをさす。
- (6) 純粹に論理性のみを徹底させるのではなく、形而上学的考察としては、ある適當の線でそれを打ち切ろうとするのが、テオフラストスの考え方の特色の一つである。§10 のおわりの部分を参照。

VIII

- (1) 以上は学的認識に対して感覚が有する意義づけにもなる。
なお、この行には φ - の頭韻がある。
- (2) まづ、一般的な意味での差別、つまり類的・種的・数的な差別を共に含めたもの。
- (3) この場合には、普遍的存在が類または種であって、従ってそれぞれのものは種的または数的には差別があることになる。
- (4) たとえば、三角形の本質的な属性として、内角の和が二直角である、という如きもの。
- (5) この際には、固有性は問題とされないのである。
- (6) たとえば、その種に属するもののすべてに共通な種的同一性。
- (7) たとえば「等しさ」が数と線分においてはそれぞれ異り、また、

「生命」が動物の場合と植物の場合とでは異っているように、それぞれの種によっては多少意味合を異にする類的同一性を言う。

- (8) たとえば、実践的な事柄は個々の具体的な行為としてのみ現実的である。
- (9) 換言すれば、最もかけ離れた、相違の甚だしいものをも、類比は結びつけることが出来る。なお、ここにもテオフラストスのアナロギアによる方法の強調がみられる。
- (10) これは学問一般にわたってテオフラストスがなしている積極的な主張の一つである。
- (11) 以上の区別は存在性の高貴さによる秩序づけに従っているものの。
- (12) 数学の対象にあつては、数や線や平面や立体などの区別に応じて、それぞれにおける特有性が認められているように。
- (13) 上記の数学的存在自体の間の差別に対応して、数学的諸学科の各々がもっている特有性。
- (14) 以下に続く本文から明らかなように、これは一種の詭弁論法である。
- (15) 上記注解(9)を参照。
- (16) この区別はアリストテレスにおいて非常に特徴的なもの。
- (17) 感覚によって得られる記憶や経験にたよって、技術的知識に到達し、さらに概念的推理を働かせることによって、学的認識を行なうこと。
- (18) いわゆる直観知をいうもの。
- (19) これ(複数形)は不動の動者や天球層をも指すものと思われる。
- (20) これはおそらくメテオロロギカの対象となるものをさす。
- (21) これは、複数形ではあるけれども、不動の動者をさすものと考えられる。
- (22) このくぐり、形而上学の研究方法は、アリストテレスなども

- 言うように、自然学の研究方法とは区別して考えるべきである、との意味に取る。
- (23) 天界はその運動に関しては、自然学（天文学）の対象になる。
- (24) これは §24 のおわりの説明を指すものとしても、結局は、特にとりたてて説明するところがないのも同然である、と批判され得るであろう。しかし、テオフラストスは、動物や植物の場合におけるアナログアに訴えて、その本質に属すべきものとするのが妥当である、という見解なのであろう。
- (25) 以上 §27 の後半からは、§8 のはじめ、§11 の前半、§16 のおわりなどで提出された問題に対応して、テオフラストス自身の解釈を述べたものであろう。

K

- (1) ここのテキストには同意異文の削除がある。
- (2) ここにも同意異文の削除がある。
- (3) §10 の中ほど、および §15 のおわりを参照。
- (4) 前節 §30 の後半を挿入的にとって、ここから以下は前節の中ほどに立てられた設問をうけるもの、と考える。
- (5) 以上ここまで、テオフラストスは宇宙の目的論的な解釈にはある限界を置くべきことを、具体的な事象に訴えることによって、主張して来た。これより以下、§32のおわりまでは、転じて、存在を全体としてみるときに、それはやはり善であり美であることを認めようとするものであろう。ただし、原文の読み方そのものにも多少問題の点がなくはない。
- (6) テオフラストス自身の見解では、悪を単に消極的なものであり、無規定性に基づくものである、とするように思われる。
- (7) これはピタゴラス学派の宇宙観における中心火をさすものであって、§10 前半の考え方とは異っている。

- (8) 以上は直接には、§12 および §13 と共に、プラトンのアイデアの説に関するものであるが、しかしピタゴラス学派もまた十対か
らなる原理の対立表などを考えていたため、ここでも一応は同様の
考え方のものとしてみなされるのであろう。
- (9) §28 から §29 前半にかけてをさす。
- (10) 必ずしも目的性に適っているというわけではないが、しかし、
少くとも……，となるべき論旨の続き具合であらう。
- (11) 数的にも形体的にも位置的にも無限定なものである，と考
えた。
- (12) 直接には §31 のはじめにおいて。
- (13) 以上は原典の末尾に付記されている古註^{スコリア}であるが、以下に蛇足
として、これの含んでいる問題と関係のある点を、ほんの二・三の
み手短かに注記することにする。

アンドロニコス（ロドスの）はリュケイオン最後の学頭となった
人で、彼がアリストテレスおよびテオフラストスの著作稿本の編修
と公刊を行なうに到るまでの——それは紀元前四十年頃のことであ
ったとされているが——諸般のいきさつはあまりにも有名な話であ
らう。

ヘルミッポス（ズミュルナの）は紀元前二百年頃のペリパトス学
派の人。浩瀚龐大な伝記の類を集録し、のちにそれはプルタルコス
の資料として用いられた。

さて今日われわれに伝わっているディオゲネス・ラエルティオス
の中のテオフラストスの著作目録も、主として上記アンドロニコス
およびヘルミッポスのそれを典拠にしたものとされている——従っ
て、もちろんこの「形而上学」の名は、現存の目録中に上げられて
はいないわけである。——

ニコラウス（ダマスクスの）——紀元前六十四年ごろの生まれ、
没年は不詳——はヘロデス大王の顧問官でもあったペリパトス学派

の著述家で、その膨大な世界歴史は紀元前四年にまで及んでいる。

ところで、この箇所における「アリストテレス形而上学……」
Μετὰ τὰ φυσικά という語句は、のちにヨーロッパの思想史上はなはだ軽くはない意義を担うこととなったこの名辭が、直接文献の上に姿を覗かせている、最も古いものの一つとして、注目されるわけである。なお、この名称の由来の解釈に関する、まことに複雑きわまる問題に関して、一石を投じたものとして、次の論考が参照されるであろう。H. Reiner, Die Entstehung und ursprüngliche Bedeutung des Namens Metaphysik (Zeitschrift für philosophische Forschung Bd.VIII, H. 2, 1954). Die Entstehung der Lehre vom bibliothekarischen Ursprung des Namens Metaphysik (Id. Bd. IX, 1955).